「男、突っ走る！」

第88回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（23）	『オフィスツリーイン』代表	
木内　孝志（52）	雅也の母	
木内　真保（50）	雅也の母	
木内　健次郎（19）	雅也の弟	
黒田　武彦（46）	市議会議員	
国枝　佐代子（58）	『スリジェネ』総合プロデューサー	
山中　敦夫（43）	劇団主宰者	
田所　俊子（62）	市民映画プロデューサー	
阿川　武久（37）	振付師	
野倉　浩太（21）	『スリジェネ』メンバー	
藤田　昇平（21）	『スリジェネ』メンバー	
前川　啓司（29）	『スリジェネ』メンバー	
山森　直海（18）	『スリジェネ』メンバー	
富永　茜（22）	『スリジェネ』メンバー	
大坂　美央（16）	『スリジェネ』メンバー	
熊瀬　怜奈（17）	『スリジェネ』メンバー	
阿川　緑（29）	『スリジェネ』メンバー	
麦沢　愛花（19）	『スリジェネ』メンバー	
坂本　寿梨（19）	『スリジェネ』メンバー	

1　黒田の選挙事務所

雅也がデザイン案を見ながら、黒田と話している。

黒田「いやぁ、第二弾も良い感じにできそうだね。どうしても、自分で作っちゃうと、専門用語とか難しい言葉ばっかり使っちゃうんだよ。でも、木内君が編集してくれると、言葉をかみ砕いた表現にちゃんと直してくれるから助かるよ」

雅也「ありがとうございます。独りよがりなものを作るより、せっかくなら後援会の皆さんにちゃんと読んでもらえる内容の方が良いと思って」

黒田「木内君も、選挙に出れば良いのに」

雅也「とんでもない。僕は、自分で何かをやってみたいと思っても、市議になって何かをしたいとまでは思えなくて」

黒田「まあそれでも、もう少し木内君みたいな若い子が、もっと政治に興味を持ってくれたら良いんだけどね」

雅也「僕もまだまだ勉強不足ですから。ただ、せっかく地元に住んでるのなら、今地元でどんなことが起こってるのかを知るのには、こうして黒田さんの会報誌を作らせていただくのは良い機会だと思ってます」

黒田「木内君が、ゴリゴリ政治に染まらなければ良いけどね」

雅也「こういう時は、ちゃんと客観視して第三者目線で書くことを心がけてますから」

黒田「さすがだね」

雅也「黒田さんの会報誌は、黒田さんの視点や思いを強くしても良いと思いますけど、一般のメディアではあまり政治色は出さないようにしてます。あくまで、制作を引き受けただけで、その会派や党を応援するってわけじゃありませんから」

黒田「木内君みたいに、こういう広告物を作る人は、そういうこともちゃんとしないといけないもんね」

雅也「たまにあるんですよ。市議とか県議と

か市長とか、そういう政治家の広報物を作ったことを公表すると、あそこの会社はあの会派を応援しているのか、って指摘されたり」

黒田「とんだ風評被害だね。作っただけで、そこまで言われるなんて」

雅也「そうなんです。だから、実績を公表するときには、面倒ですけど注意書きで、特定の党や会派を応援する目的ではありません、って入れるようにしてるんです」

黒田「政治思想は人それぞれだからね。難しいんだよね、政治の世界に関わる仕事をするっていうのは」

雅也「僕も実感してます。以前、ＳＮＳで黒田さんの会報誌の一号目を制作したことを公表したときなんて、それを見た同級生が、『選挙にでも出馬するのか』なんて聞いてきて。もちろん、全否定しましたけどね」

黒田「似合うと思うけどな」

雅也「なりませんよ。せいぜい、舞台で政治

家の役をやるぐらいですかね」

黒田「そういえば、最近演劇のほうはどうなの？」

雅也「今、二つ掛け持ちしてるんですよ。大晦日のステージと、二月の市民演劇祭と」

黒田「大変だね。確かに、前と比べてちょっと痩せた気がするもん」

雅也「全身使いますからね。まあ、良い運動だと思って」

黒田「（デザイン案を見て）これ、一通り内容はこっちでもチェックしとく。問題なかったら、そのまま印刷会社に入稿しちゃって」

雅也「分かりました。よろしくお願いします」

2　南公民館・全景

3　同・和室

私服の衣装が並べられている――雅也、阿川、美央、浩太、茜、緑、寿梨が服

を合わせながら相談をしている。
雅也「どっちが良いかな？」
緑「同じ場面で、服の色は被らないほうが良いよ。遠い席で見てる人が、見分けつかなくなるから」
雅也「ああ、そうですね」
寿梨「こっちのほうが良いかな」
茜「ちょっと派手じゃない？」
浩太「原色系だと、変に目立つよな」
寿梨「じゃあ、こっちか」
美央「うん、そのほうが良いと思う」
阿川「うっちー、どう？」
雅也「そうですね。（と服を見て）あ、こっちの服はどうですかね」
緑「それだと、場面の雰囲気的に合わないと思う」
雅也「なるほど……。じゃあ、やっぱりこっちにしましょうか」
N「市民演劇祭では、ようやくキャストが確定し、十二月に入ると通し稽古ができるよ

うになりました。また、衣装は予算がなかったため、私服を持ち寄ることになりました。色彩のチョイスが皆無の僕には、衣装の判断もメンバーたちの力を借りること状態となっていました」

4　同・大会議室

準備をしている雅也、阿川、茜、浩太、昇平、啓司、直海、美央、緑、寿梨。

雅也「じゃあ通し稽古進めていきます」

以下、通し稽古をカットバック。

×　×　×

美央演じるひかりと友人・まどか演じる直海。

直海「終わったねぇ、三学期」

美央「うん」

直海「春休み、どっか行きたいね！」

美央「けど予備校があるじゃん」

直海「ちょっと！　それは言わないでよ」

美央「あ、ごめん……まどか」

直海「どうしたの、ひかり？」

×　　×　　×

美央演じるひかりが、鞄から模試の結果を取り出すと、ため息をつく――浩太演じる幼馴染・翔が忍び足でやってくると、模試の結果を取り上げる。

浩太「何落ち込んでんだよ」

美央「ちょっと翔くん、返してよ」

浩太「取れるもんなら、取ってみろよ」

美央「いじわる」

浩太「（模試の結果を見て）ほとんどE判定じゃねえか」

美央「関係ないでしょ！」

と、スケッチブックを持った幼馴染・茜演じる笑理がやってくる。

茜「二人とも、何やってるの」

浩太「笑理ちゃん！」

茜「またいじめたの？」

浩太「違えよ。こいつがボーッとしてたから、慰めてやろうと思って」

×　　×　　×

浩太と、緑演じる姉・智香。

浩太「調子はどうだ？」

緑「大丈夫よ。昨日より、大分楽になった」

浩太「よく眠れたか？」

緑「うん」

浩太「やっぱりな」

緑「え？

浩太「隣の部屋からイビキ聞こえてたぞ」

緑「そんなにひどかった？

浩太「嘘だよ」

緑「翔ッ……」

浩太「悪い悪い。まあ、智香姉の病気ぐらい俺が治してやるよ」

緑「ありがとう。気持ちだけで嬉しいよ」

×　　×　　×

茜、啓司演じる彼氏・良介、寿梨演じる後輩・萌。

茜「ごめん良介。今日も一緒に帰れない」

良助「そんな気はしてた」

茜「もう少しで完成するから」
良助「作品作りに専念するのも良いけど、就活はどうなんだ？」
茜「就活はしない」
良助「え？」
寿梨「そうなんですか？」
茜「ああ、萌にも話してなかったね。私ね、絵本作家の先生のところで修行することにしたの」

×　×　×

美央と、昇平演じる兄・真吾。
美央「お兄ちゃんと一緒にしないでよ！」
昇平「ひかり……」
美央「お兄ちゃんと比べられてたことが、どれだけ苦痛だったか」
昇平「比べるなんて……」
美央「目標もないのに予備校に行って、それで成績も上がらない私なんて、どうせ落ちこぼれだよ……」
昇平「そんな風に言ってないだろ……」

美央「普段から思ったてくせに！」

×　　×　　×

演出席で、真剣な眼差しで見ている雅也。

5　木内家・雅也の部屋（夜）

雅也が仕事をしている。

N「通し稽古が進み、やがて年内最後の稽古を目前に控えたある日……」

雅也のスマホに、阿川から着信がかかってくる――雅也、気づいて電話に出ると、

雅也「もしもし、お疲れ様です」

阿川の声「ごめんね、うっちー。遅くに」

雅也「いえいえ。何かありましたか？」

阿川の声「実はね、緑が肺炎で入院することになって」

雅也「え、ミドリさんが……？　大丈夫なんですか？」

阿川の声「大晦日のカウントダウンイベント

があるから、何とか一週間以内には退院したいって本人は言ってるんだけど」
雅也「今週末が年内最後の稽古になりますけど、難しそうですよね」
阿川の声「そうなんだよ。演劇祭はまだ時間があるから何とかなるけど、カウントダウンイベントのほうをどうしようかと思ってね。数日前に、来られる人だけでカラオケとかに集まって練習するしかないかな」
雅也「年末になると、公民館は閉まっちゃいますからね。カラオケしかないと思います」
阿川の声「一度、国枝さんとヤマさんにも相談してみるよ」
雅也「分かりました。まずは、ミドリさんのこと大事になさってください。では、失礼します」
と、電話を切る――険しい顔の雅也。

6　ファミレス

雅也、茜、浩太、直海、美央、寿梨が

話している。
美央「このタイミングでミドリさんが入院だなんて、大変だね。今日が年内最後の稽古なのに」
雅也「それもあるから、昨日国枝さんから連絡があったように、十二月二十九日にカラオケで最終稽古をすることになったでしょ。ただ、まだその日までにミドリさんが退院するかどうかだけど」
寿梨「ミドリさん、そんなに悪いの？」
雅也「俺も詳しく聞いてなくて。ただ、阿川さんからは肺炎だって聞いてる」
茜「最悪、降板の可能性もあるってこと？」
浩太「ただ、そうなると今更代役なんて無理だろう」
茜「そうか……」
雅也「呪われてるのかな、『スリジェネ』って」
美央「変なこと言わないでよ、うっちー」
雅也「だって、このタイミングで入院だよ。

稽古だって今日は、マイキー休みだしさ」

直海「まあ、今日の稽古だって出席率悪いじゃん。コウタだって、これから東京行くんでしょ」

浩太「まあな。東京のほうでお世話になったプロデューサーから、忘年会に誘われてね。（と雅也に）うっちーのこと、よく知ってるって言ってたぞ」

雅也「誰？」

浩太「山岡さん」

雅也「え、あの山岡プロデューサー？」

浩太「そうそう。前に、端役で出演した短編ドラマがあったんだけどさ、そこでプロデューサーをしてたのが、山岡さんだったんだよ」

雅也「そうだったんだ」

浩太「自己紹介で、『スリジェネ』の話したらさ、『ああ、木内さんがやってるやつですよね』って、うっちーの名前が出たからびっくりしたよ」

雅也「世間、狭ッ」

寿梨「そのプロデューサーは、うっちーとどういう関係なの？」

雅也「学生時代に知り合って、去年クランクインした映画があるんだけど、そこで脚本を担当したのが俺で、プロデューサーをしたのが山岡さんなの。今年の春、ちょうど『スリジェネ』一期生の顔合わせがあるときも、ちょうどタイミング重なって千葉のローカル局の深夜ドラマの脚本依頼があってね、その時も一緒に仕事したの。今回の忘年会だって、俺も誘われてたんだけど、さすがに忘年会優先するわけにはいかないでしょ。だから、今回は諦めたの」

浩太「現場で、うっちーの話したんだよ。他のスタッフさんたちも、うっちーのこと知っててさ。意外とうっちーってすげえんだなって」

雅也「すごいわけないでしょ。今の状況を見て」

美央「ＳＮＳでうっちーの実績見たことあるけど、やっぱりうっちーってすごいと思うよ」

茜「何もないところから、作品を作るなんて、私たちにはできないんだから。うっちー、もっと自信持って良いよ」

雅也「うん……」

7　カラオケ店・一室

雅也、佐代子、山中、阿川、浩太、茜、直海、美央、怜奈、緑、愛花、寿梨が集まっている。

N「年末、何とかミドリさんは退院することができ、十二月二十九日にカラオケボックスで集まり、最後の稽古をしました」

×　×　×

動きを確認している雅也、茜、寿梨。

茜「私の絵本に何てことするの、物語がめちゃくちゃになっちゃうじゃない」

寿梨「もうやめてよ」

雅也「何だよ、邪魔するなよッ」
寿梨「うっちー、ここでさ、絵本奪うじゃん。
これ、もう少し強く奪い取る感じで良いよ」
雅也「分かった」
茜「今のままだと、優しすぎるんじゃない」
寿梨「まあ、うっちーの人柄が出ちゃってる
んだろうね」
雅也「（苦笑して）じゃあ、ここは悪になり
ます」

8　農場公園・並木通り（夕）
来場客であふれている――雅也と山中
が歩いている。
N「そして大晦日になり、カウントダウンイ
ベント本番の日がやってきました」

9　同・楽屋
衣装を着てそれぞれ動きの練習やセリ
フ確認をしている雅也、佐代子、山中、
阿川、浩太、茜、直海、怜奈、緑、愛

花、寿梨――田所が美央のメイクの手伝いをしている。

阿川「そろそろ時間ですね。みんな、楽しんでいきましょう」

一同「はいッ」

佐代子「じゃあ、うっちー。円陣組もうか」

雅也「あ、そうですね」

と、円陣を組む一同。

雅也「では二期生の方もいらっしゃるので、改めて円陣の説明をします。僕が『未来に向かって、僕ら』と言ったら、全員で右足をポンと出して『スリジェネ！』と言ってください。それでは行きますよ。では大晦日カウントダウンイベント、楽しんでいきましょう。未来に向かって、僕ら……」

一同「スリジェネ！」

阿川「よろしくお願いします」

雅也「よろしくお願いします」

10　同・ホール（夜）

来場客であふれている――その中に田所も座っている。
軽快な音楽に合わせて、一同衣装に身を包んだキャストたちが踊っている。

11　同・並木道（夜）
雅也と田所が歩いている。
雅也「今日はお疲れさまでした」
田所「いえいえ。うっちーも、今いろいろ大変みたいね。国枝さんからいろいろ話は聞いてるわ」
雅也「そうですか……」
田所「初めてのことだから、たくさん挑戦してみるのも大事よ。失敗は、誰にでもあるんだから」
雅也「ええ……」
田所「本番、私見に行くからね」
雅也「ありがとうございます」
と、二つの人影とすれ違う――雅也、立ち止まって振り向く。

田所「どうしたの、うっちー？」
雅也「いえ……気のせいですね」
怪訝な顔の雅也。

12　木内家・居間（夜）
年越しそばを食べている真保と健次郎
――台所で年越しそばを作っている孝志。
と、雅也が帰宅する。
雅也「ただいま」
一同「おかえり」
孝志「ちょうど帰ってきたな。そろそろ年越しそばできるぞ」
雅也「良かった。本番終わった途端に、お腹空いてきちゃってさ」
健次郎「先に食ってる」
雅也「エビ何本食べた？」
健次郎「三本」
雅也「三本？」
真保「よく食べるでしょ。それに、麺なんて

二玉よ」

雅也「どこに入るんだよ」

孝志「麺、一玉で良いか？」

雅也「うん。お腹空いてるけど、いざ食べ始めたらそんなに入らないと思う」

×　×　×

年越しそばを食べている雅也と孝志――テレビを見ている真保と健次郎。

真保「（雅也に）三が日は何もないの？」

雅也「うん。三が日は、ひたすら休みます。もう何もしたくない」

美味しそうにそばをすすっている雅也。

つづく